

# 組合NEWS

Faculty and Staff Union of Kanazawa University  
金沢大学教職員組合執行委員会  
金沢市角間町  
Tel.076-262-6009 (FAX同じ) / 角間内線2105  
E-mail kanazawa@ku-union.org  
ホームページ http://www.ku-union.org/

2015年11月4日

通巻1234号

## この号の内容

- 執行委員長 所信表明
- 書記長 所信表明
- 2015年度役員選挙結果
- 全大教教研集会の報告

## 2015年度 執行委員が決まりました。



所信  
表明

執行委員長

山上 尚幸

(総合メディア基盤センター)

### ぜひ組合に入りませんか

2015年度執行委員長に選出されました山上です。技術職員で委員長という職は厳しいとは思いましたが、今日まで35年間組合員であったことを振り返り、また反省も踏まえ今年度の組合執行委員長を担当させていただくことにしました。

ここで挨拶の題目として「組合に入りませんか」としました。職場に組合は必要かどうかと聞かれたら、皆さんはどう思いますか？組合があることは雇用者側に対する抑止力になると私は思います。

私事です。次男は派遣労働者です。小さな派遣会社に勤めています。もちろん組合などありません。最近では派遣先がコロコロ変わります。休日、祝日出勤も派遣先の要請で決まりますがそれに対する手当は微々たるものです。もちろん代休制度など適用されませんし、有給休暇も派遣先の手前なかなか申請できない状態で働いています。まさにブラック企業ですが辞めたら次の仕事を探すことが、だんだん難しくなっているため我慢しているようです。私は労働者の権利は知っていますが息子に対しアドバイスしていませんと言うかできません。首になるから・・・

いまや労働者のうち4割弱が非正規労働

者を占めてきている中、労働者の権利を守れるのは組合だけだと思っています。金沢大学教職員組合がこれまで交渉してきた結果、改善された部分もたくさんあります。何より大学側がコンプライアンスを遵守する姿勢を維持しているのも組合があればこそだと思っています。皆さんの組合への加入をお待ちしています。

さて、委員長就任の抱負として、8月に引き継いだ課題の中に長年要求してきた項目が多く残っていることに改めて驚きました。今年度の執行部として、引き継いだ課題のうち一つでも多く解決できるよう努めたいと思います。

現在、文科省は学長の権限強化と予算の縛りであらぬ方向へ導こうとしている気がします。大学は知の拠点であり、もっとゆとりを持った自由な研究活動の中で新たな技術や発想が生まれるところだと思います。大学評価、教員評価、職員評価の波にのまれ大学の中にゆとりが感じられなくなっています。今の組合の力では何ともしがたい部分ですが何かできることはないか考えたいと思います。簡単ですが委員長就任の挨拶とさせていただきます。

所信  
表明

書記長  
榎本 剛士 (外国語教育研究センター)



## 「大学」よりも「人」を

このたび書記長の任を仰せつかりました、榎本です。言語人類学と語用論を理論的ベースにして、日本の英語教育をあれこれと研究しています。「言語人類学」「語用論」はあまり聞き慣れない分野かと思いますが、どのような問いを追究する学問かといいますと、「言語構造、語用（言語使用）、イデオロギーの三者はどのように相互作用しているのか」、「言語と文化はどのように体系的に関わっているのか」、「人間が考え、行動するとき、それはどのような社会的実践や社会の変容に帰結する（しがち）か」といったところですね（もちろん、色々なアプローチがあります）。

さて、本学着任以来、私は「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」という理念に魅力を感じています。教員はバリバリ研究し、「ガチ」で学生に対峙して、学問を体系的に、惜しみなく（そして、その意義がちゃんと分かるように）還元する。学生は他分野と自己相対化に開かれた様々な学問との出会いを通じて「自分自身のブランド」の種を獲得し、活躍の舞台がどこであれ、それぞれの道を目指していけばいい。（教員目線ですが）基本は至ってシンプルであると思います。

しかし、それを組織的に、比較的大きな規模で、ムラなく、一定の財政的・法的制約の中、他大学との競争と文科省（および、財界）による評価の下で行うとなると、これが極めて難しい。この原稿を書くにあたり、「我が国の高等教育の将来像（H17中教審答申）」、「国立大学改革プラン（H25文科省）」、本学が提出したスーパーグ

ローバル大学創成支援「構想調書」、

「YAMAZAKI プラン 2014」、そして「共通教育改革素案」に再度、ざっと目を通しました。様々な分野・機関・部局間の権力構造、様々な立場やキャリア・ステージ、様々な制度とそれらの向こうにある歴史、あまりに多くのことが錯綜しており、「ガラッと変えて、ガラッと良くなる」類のものではないことは確かです。また、改革を主導する側がいつ・どこで・どのように大学人として自己形成するかによって、前提となる発想の枠組み、解決すべき（と認識される）問題、乗り越えたいこと・人が異なるようにも見えます。

これらを踏まえて「私が大学当局に言いたいことは何か？」と考えると、「ちゃんと人を見て下さい」の一言に尽きます。学長、そもそも輝くべきなのは金沢大学ではなくて、金沢大学の学生、教職員、卒業生でしょう？教育理事、研究と教育の「適正な分離」ではなく、「適正な統合」と言った方が、（特に若手）教員のやる気が起きませんか？前期のある授業後に学生と話していたら、「金沢大学、迷走してますよね」と言われてしまいました（汗）。教職員が大学に対して言うのならまだ分かりますが、この言葉を（たとえ数人であっても）在学中の学生に言わせてしまっている現状に、なんとも悔しい想いでいっぱいです。

着任5年目の私に「本会書記長」はあまりに大きな役ですが、少しでも貢献できるよう、勉強しながら努めて参ります。どうぞよろしくお願い致します。

## 今年の役員をご紹介します。投票率は67.6%でした。

執行委員長	山上 尚幸	工学系分会 (総合メディア基盤センター)	技術系
副執行委員長	清水 邦彦	角間北支部 (歴史言語文化学系)	教員系
書記長	榎本 剛士	角間北支部 (外国語教育研究センター)	教員系
書記次長	河合 隆平	角間北支部 (学校教育系)	教員系
会計委員	遠藤 徳孝	理学系分会 (自然システム学系)	教員系
執行委員	碓山 洋	角間北支部 (経済学経営学系)	教員系
々	久保 京子	医学系四分会 (附属病院)	医療系
々	汲田 幹夫	工学系分会 (自然システム学系)	教員系
々	杉山 博則	工学系分会 (自然システム学系)	技術系
々	深田 和人	附属学校園支部 (高等学校)	教員系
監査委員	坂本 敏夫	理学系分会 (自然システム学系)	教員系
々	小林 信介	角間北支部 (経済学経営学系)	教員系

よろしくお願ひします！



**報告**

# 全大教第27回教研集会

9月11～13日、金沢大学を会場校として全国大学高専教職員組合第27回教職員研究集会が開催されました。直前の集中豪雨のために参加を見合わせた方もあり、参加者は155名、例年よりやや少ない数になりました。そんな中であって本組合からは26名が参加して集会を盛り上げました。それにしても、地震や噴火など、これだけ天変地異が続くと、本来、為政者は自らの政治の至らなさに思いを致したのですが、我が国の宰相はそうした見識を持ち合せていないようです。

一方、我らが山崎学長は、激務の間隙を縫い、会場校挨拶をご快諾くださいました。心から感謝申し上げます。

教研集会の成果等については、後日、全大教から報告があると思いますので、ここでは若干の感想を記すに止めます。

## 格差・貧困化が増大する社会と高等教育

今回の集会の全体テーマは「広がる格差・進む貧困化の中での高等教育の展望」で、このテーマに即して、小林雅之東京大学・大学総合教育研究センター教授の記念講演がありました。所得格差が大学進学率に及ぼす影響が拡大している実態から授業料・奨学金制度の在り方に至るまで、たいへん示唆に富むお話でした。いずれ講演録として公表されるでしょうから、是非ご覧いただきたいと思います。

ただ、組合活動としての取組はなかなか難しい問題です。「授業料値上げ反対」「授業料免除・奨学金制度の充実要求」が直ちに思いつくところですが、この際、思い切って「授業料の無償化」を提言するのも一法かもしれません。それは国立大学の予算の実態を人々に知ってもらう機会にな

ると思うからです。いまだに国立大学は国からの交付金だけで運営されていると誤解している人がたくさんいます。そうした誤解を解かないかぎり、いくら国立大学の窮状を訴えても理解してもらえません。

いずれにせよ、組合だけでは解決できない問題ですから、組合が大学を動かし、大学が国大協を動かし、国大協が文科省を動かすという方向に進む以外になさそうです。もっとも小林先生によると、その先の財務省が首を縦に振りそうもないのですが。

### 教職員の間には広がる疲労感

悪名高き「ミッションの再定義」から始まった《国立大学改革プラン》、特に改革加速期間の「グローバル化」「イノベーション機能強化」「人事・給与システムの弾力化」の推進、さらに「機能強化の方向性」といった文科省の施策に翻弄され、国立大学の教職員（学長を含めて）は多忙化の波に洗われています。ある分科会ではひたすら文科省の意向に沿った改革案づくりに追われ、疲労感ないし徒労感が募っている実態が報告されました。特に学部改組を進めている大学は悲惨の極みにあるようです。

文科省から「おたくは10何年も改革をしていませんね」と言われ、急いで改組案を作って持ち込むと、当然のことながら修正要求。文理融合型が求められていると判断して作った改組案は、「それはもう〇〇大学が提案している」と言われて頓挫。文科省の担当者が替わると前回と異なる話が出てくるなど、もう「大学イジメ」としか思えない状況が現出しています。そして改組案の変更をめぐって会議が続く中、学部間の対立や相互不信など、学内で深刻な事態が進行し、教職員は疲弊し切っているとのこと。

本学でも国際基幹教育院の設置を皮切りに、組織改革が推進されると予想されます。しかしながら、人文社会系学部の縮小・廃

止を打ち出しておきながら、経団連の批判を受けるや、あわてて弁明に走るなど、文科省には確たる理念は存在しません。曖昧模糊とした「社会的要請」に惑わされることなく、将来の大学像を見据えた対応が必要です。なお、分科会の感想めいた結論は「結局生き残るのは改革をしない大学ではないか」でした。

### 多様化する教職員に対応する 取組の必要性

山崎学長から「むかし若かった人たち（ばかり）」と評され、大学生協が周到に用意してくださった交流会の席上、しばしば「次は若手に参加してもらおう」といった挨拶が聞かれたように、年配の参加者が多かったことは否定できません（もっともそれゆえ「旧交を温める」席が片町や香林坊に設けられ、わずかながら地域の活性化に貢献しました）。しかし一方、ポストクの立場から大学運営に対する意見を述べた方、事務補佐員としてリーディング大学院の運営に関わっている方（その業務は補助的・臨時的とは言えない内容でした）など、若い参加者も少なくありませんでした。

その方たちの発言を聞きながら、大学の構成員の多様化が進み、組合が取り組むべき課題も多様化していることを実感しました。本学においても、例えばリサーチプロフェッサーなど、従来の大学にない働き方をする教職員が増えていますから、私たちの想像を超えた新たな問題が発生しているのではないかと懸念され、組合はそうした問題への対応も必要になるだろうと予想されます。

小さなことですが、本学では組合の要求を通じ、博士研究員への宿舍貸与が実現します。より大きな果実を得るためには、組合の強化が不可欠です。みなさんの理解を切に願っております。